

2026年度東京大学・京都大学入試における生成AI「首席合格」の深層分析と次世代推論モデルの社会的・教育的波及効果

Gemini 3.1 pro

1. 知能の転換点としての2026年大学入試

2026年4月27日、日本の教育界のみならず、世界のテクノロジーおよび高度専門職の労働市場において、人類の知能の定義そのものを揺るがす歴史的なマイルストーンが確認された。生成人工知能(AI)に特化したベンチャー企業である株式会社LifePrompt(ライブプロンプト、東京都新宿区)が実施した検証プロジェクトにおいて、OpenAI社が開発した最新の生成AIモデル「ChatGPT 5.2 Thinking」が、日本国内で最難関とされる東京大学理科三類(医学部)および京都大学医学部医学科の2026年度入学試験において、人間の合格者最高得点(首席)を劇的に上回る成績を記録したことが明らかとなった¹。

この出来事が持つ真の衝撃は、単にAIが高いスコアを記録したという表面的な事実にとどまらない。その「進化の非線形的な速度」こそが、専門家たちの想像を絶するものだった。「チャッピー」の通称で呼ばれるこのAIモデル群は、わずか2年前の2024年に実施された東大入試検証において「全科類不合格」という結果に終わっていた²。さらに、前年である2025年度入試問題を用いた検証(OpenAIのGPT-o1モデルを使用)においても、東大理系数学の得点は120点満点中わずか38点に留まり、厳密な論理展開を必要とする高度な数理的推論は依然としてAIにとって高い壁であると見なされていた¹。

しかし、そこからたった1年という極めて短期間で、AIは推論能力のブレイクスルーを果たし、2026年度の入試では極めて難解であった今年の数学問題において「満点」を叩き出し、最終的に首席合格水準を50点近くも凌駕するに至ったのである¹。本分析レポートでは、この歴史的検証の裏側にある厳密な手法、各AIモデルの定量的スコアデータ、採点を担当した大手予備校・河合塾の講師陣による定性的な答案分析を統合する。そして、次世代推論モデルのアーキテクチャ特性を解剖するとともに、この結果が示唆する教育パラダイムの不可逆的な転換、ならびに産業界における「AI社員」の台頭に伴う労働市場の再定義について、多角的な視点から網羅的かつ徹底的に深掘りを行う。

2. 検証プロジェクトの厳密な設計と方法論的担保

このような画期的な成果を評価する上で最も重要なのは、その結果が導き出されたプロセスに人為的な「下駄」が履かされていないかを検証することである。株式会社LifePromptによって主導された本プロジェクトは、AIの真の実力を測るために、人間の受験生と極めて近い、厳格かつ公平な環境下で実施された³。

2.1. 自動受験システムによる人為的介入の完全排除

本検証の特筆すべき点は、AIに対するプロンプトエンジニアリング等の人為的なアシストを完全に排除するため、独自開発された「自動受験システム」が導入されたことである³。2026年2月に実施された大学入学共通テスト(配点110点)および東大・京大の二次試験(東大は配点440点)の問題用紙PDFデータは画像化され、チャット画面などのユーザーインターフェースを介さず、APIを経由して直接各AIモデルへと送信された¹。これにより、人間が問題をAIが解きやすい形に翻訳したり、解法へのヒントを与えたりする余地は完全に断たれた。

2.2. ブラウジングの封印と解答条件の統制

さらに厳しい制約として、AIの外部情報検索機能(Webブラウジング機能)は一切使用不可とされた³。つまり、AIは問題を受け取った後、インターネット上の解法速報やデータベースにアクセスすることなく、自身のパラメータに事前に学習された知識と、内蔵された推論能力のみで解答を導き出すことが要求されたのである。プロンプトは全科目で共通のものが使用され、高校教養課程の範囲内の知識を用いて解答すること、そして数学や理科の解答においては、数式を正確に出力するためのマークアップ言語であるLaTeX形式で出力することが指示された³。

2.3. 河合塾およびKIESによる専門的なブラインド採点

出力された解答は記述式を含むため、機械的な採点は不可能である。そのため、大手予備校である河合塾の講師陣、および関連会社である株式会社KIESの協力のもと、人間の受験生と全く同じ厳密な採点基準を用いて評価が行われた¹。このプロセスにより、単に「それらしい文章を生成するAI」ではなく、論理の飛躍がないか、計算の過程が正しいか、減点対象となる表現が含まれていないかなど、「論理構築・推論AI」としての真価が客観的に問われる設計となっていた⁵。

3. 定量的成果の全容: モデル別・大学別スコアの比較分析

検証には、現在の生成AI技術の最前線に位置する3つの最新モデルが使用された。すなわち、OpenAIの「ChatGPT 5.2 Thinking」、Googleの「Gemini 3 Pro Preview」、そしてAnthropicの「Claude 4.5 Opus」である³。これらはいずれも、従来の言語モデルを遥かに凌ぐパラメータ数と独自のアーキテクチャを有している。

3.1. 東京大学における歴史的スコアの達成

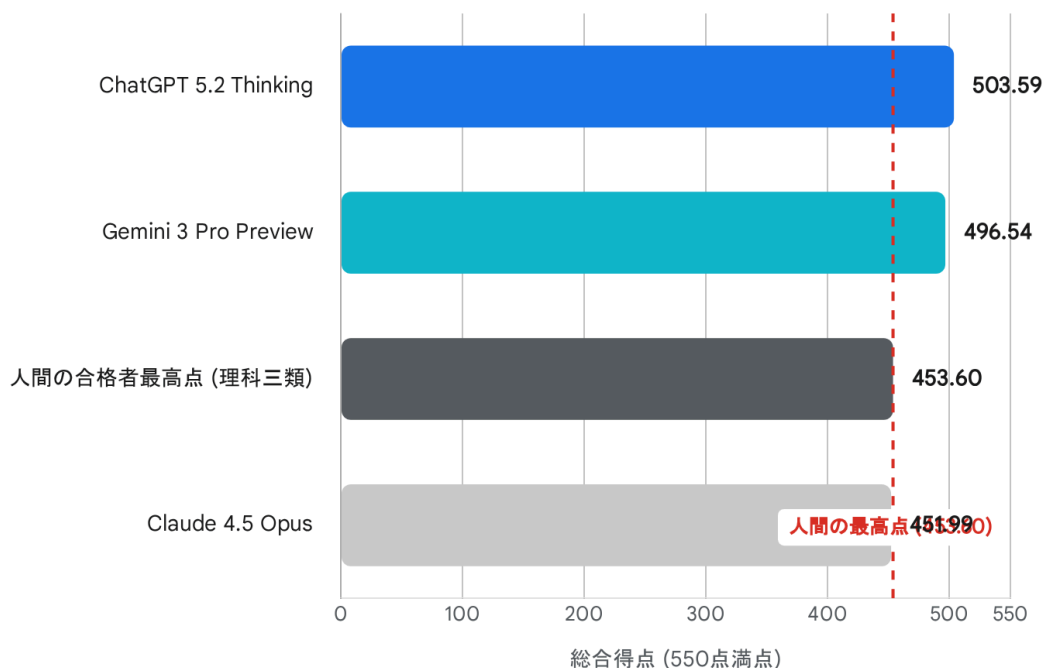
東京大学の入試(共通テストと二次試験の合算、計550点満点)において、AIは驚異的な結果を残した。理系の最難関である「理科三類」の結果を中心に、そのスコアを分析する。

受験者 / 検証AIモデル	総合得点(550点満点)	首席最高点との差	結果の特記事項
ChatGPT 5.2 Thinking	503.59点	+49.99点	理一～三、文一～三の全科類で首席を超越

Gemini 3 Pro Preview	496.54点	+42.94点	全6科類で首席を超越
2026年度 理科三類 合格者最高点	453.60点	-	人間の最高到達点(基準値)
Claude 4.5 Opus	451.99点	-1.61点	首席には僅かに及ばずも合格ラインを大差で突破

上記データが示す通り、ChatGPT 5.2 Thinkingは、人間の最高得点である453.60点を約50点も上回る503.59点という、未曾有のスコアを記録した³。Gemini 3 Pro Previewも496.54点を獲得し、同じく首席の成績を大幅に超えている。

生成AIが東大理三の「人間の限界点」を大幅に超越



2026年度東京大学理科三類（550点満点）における各AIモデルの得点と人間の合格者最高点の比較。点線は人間の最高得点（453.60点）を示しており、ChatGPT 5.2 ThinkingおよびGemini 3 Pro Previewがそれを大きく上回っていることがわかる。

データソース: [LifePrompt Note](#), [PR TIMES プレスリリース](#)

文系科目においても、AIの優位性は揺るがなかった。ChatGPTは文系（文科1～3類）で計452点を取得し、文科3類の合格者最高点である434点を明確に凌駕している¹。この結果は、AIが理系の計算問題だけでなく、文系の複雑な資料読み取りや言語処理においても、人間のトップエリートと同等以上の情報処理能力を獲得したことを裏付けている。

3.2. 京都大学における広範な学部の制覇

同様の傾向は、東京大学と並ぶ最難関である京都大学の入試（1275点満点）においても確認されている。2026年度の医学部医学科の合格者最高点1098.25点に対し、ChatGPT 5.2 Thinkingは1176.38点を叩き出し、約80点の圧倒的な差をつけてトップに躍り出た³。Gemini 3 Pro Previewも1122.75点を記録し最高点を超過した。さらに特筆すべきは、その広範な対応力である。ChatGPTは京都大学に存在する全19学部・学科のすべてにおいて、Geminiは18学部・学科で、そしてClaudeも14の学部・学科において、それぞれの合格者最高点を突破している³。これは、特定の学問領域に特化したエキスパートシステムではなく、汎用人工知能（AGI）に向けた汎用的な知的能力が、実用

レベルで確立されたことを示唆している。

4. 「満点」の衝撃と数学的推論におけるブレイクスルー

これら総合得点の劇的な底上げを牽引した最大の要因は、他でもない「数学」および「理科」科目における精度の飛躍的向上である。特に、今年の東大入試の数学は例年にも増して難解であったと評されているにもかかわらず、AIは満点を記録した¹。

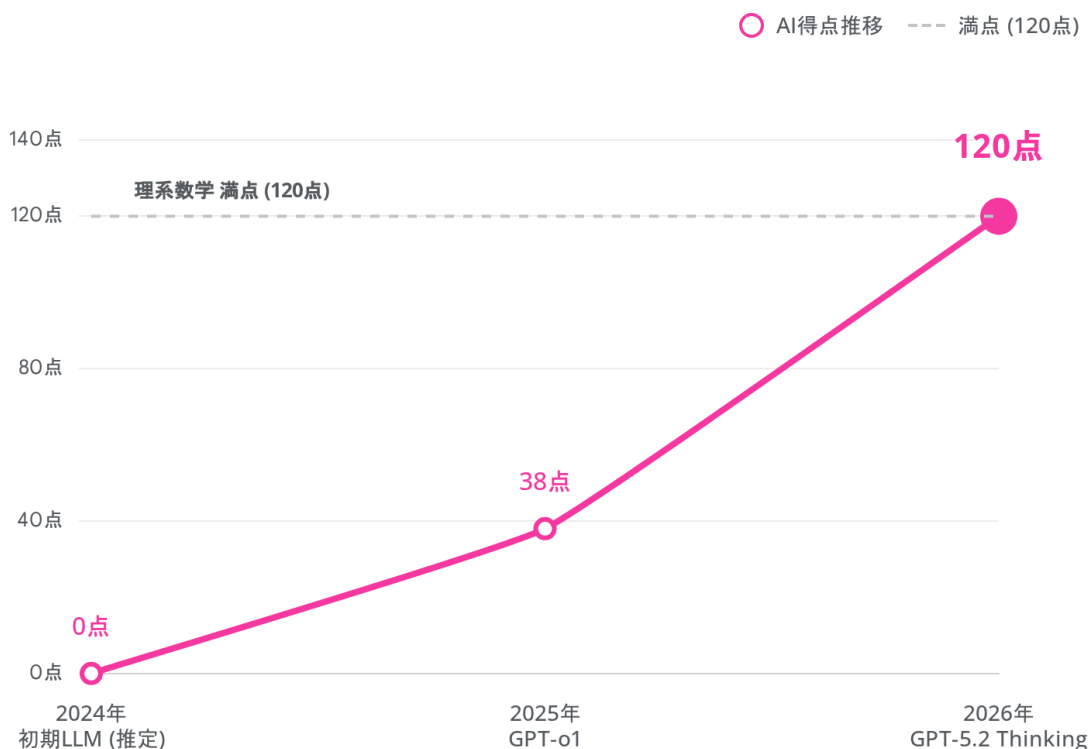
4.1. 各科目における「満点」の記録

本検証において、以下の科目でAIモデルによる「満点」が記録された³。

- 東大 理系数学(120点満点): ChatGPT 5.2 Thinking、Gemini 3 Pro Preview
- 東大 文系数学(80点満点): ChatGPT 5.2 Thinking、Gemini 3 Pro Preview
- 京大 理系数学(200点満点): ChatGPT 5.2 Thinking、Gemini 3 Pro Preview
- 京大 文系数学(150点満点): ChatGPT 5.2 Thinking
- 京大 化学(100点満点): ChatGPT 5.2 Thinking

かつての大規模言語モデル(LLM)は、確率論的な単語の予測(System 1型の直感的なテキスト生成)に基づいて出力を行っていた。そのため、文脈を紡ぐことには長けていたものの、厳密な論理展開、数式の変形、幾何学的な証明の積み重ねが要求される高度な数学を極めて苦手としていた。事実、前年(2025年)の東大理系数学におけるGPT-o1モデルのスコアは、わずか38点に留まっていたのである¹。

東大理系数学におけるAIスコアの驚異的な進化軌跡



東京大学理系数学（120点満点）における主要AIモデルの得点推移。2024年の不合格水準から、2025年のGPT-o1モデルでの38点、そして2026年のGPT-5.2 Thinkingによる120点満点到達へと、推論能力が指数関数的な進化を遂げている。

データソース: 読売新聞, 47NEWS, PR TIMES (LifePrompt), LifePrompt note

わずか1年での「38点から満点(120点)への到達」は、AIの内部構造において根本的なパラダイムシフトが起きたことを意味している。LifePrompt社のCEOである遠藤聡志氏は、「AIは東大に受かるのか？」という問いは完全に過去のものとなり、現在の問いは「AIは人間より、どれほど賢いのか？」へと移行したと述べている⁶。

5. 次世代推論モデル「GPT-5.2 Thinking」のアーキテクチャ解析

なぜ、わずか1年でこれほどの飛躍が可能になったのか。その鍵は、OpenAIが2025年12月にリリースした「GPT-5.2」シリーズのアーキテクチャ、とりわけ「Thinking(推論)」モデルの設計思想に隠され

ている⁷。

5.1. 「Thinkingプロセス」による自律的検証ループの獲得

GPT-5.2 Thinkingは、従来の「プロンプトに対して即座に確率的に最も自然なテキストを返す」というモデルとは一線を画している。このモデルは、複雑なタスクやプログラミング、論理的判断が要求される状況において、出力を開始する前に内部で「思考の連鎖(Chain of Thought)」を明示的に展開し、試行錯誤を行う能力を備えている⁷。例えば、数学の証明問題や複雑な物理の力学問題を解く際、AIは即座に答えを出力するのではなく、内部環境で複数のアプローチ(別解)を生成する。それぞれの仮説を検証し、矛盾、計算ミス、あるいは論理の飛躍を発見した場合には、自律的にバックラック(後戻り)を行い、別の解法へと軌道修正を図るのである⁷。この「自律的な試行・改善プロセス」の組み込みこそが、東大数学で満点という離れ業を可能にした中核技術である。

5.2. ハルシネーションの劇的削減と256kトークンの長文脈処理

AIの歴史的な弱点とされてきたハルシネーション(もっともらしい嘘・誤情報の生成)についても、GPT-5.2 Thinkingは大きな改善を見せている。前世代のGPT-5.1 Thinkingと比較して、誤情報が38%も減少していることが確認されている⁷。HealthBenchなどのドメイン別評価においても、ブラウジング機能を有効にした場合、幻覚率は1%未満という驚異的な結果を達成している⁸。本検証ではブラウジングが封印されていたにもかかわらず高精度な解答を導き出した事実は、モデル内部にエンコードされたパラメトリック知識の精緻さと、推論エンジンによる自己矛盾の排除能力の高さを示している。さらに、GPT-5.2は最大256kトークン(約26万語に相当)という膨大なコンテキストウィンドウを持ち、OpenAIのMRCRv2ベンチマークにおいてほぼ100%の精度で長大な文脈を統合できる能力を有している⁷。これにより、数十ページに及ぶ大学入試の問題冊子全体を一度に読み込み、離れた設問間の関連性や伏線を正確に把握し、一貫性を保ったまま処理することが可能となっている⁷。

5.3. GDPvalベンチマークと実務代行の経済合理性

この推論能力の向上は、ペーパーテストにとどまらず、実社会における高度な専門業務への適応も可能にしている。多様な職種の業務タスクを評価するベンチマーク「GDPval」において、GPT-5.2のThinkingモデルは70.7%の確率で人間の専門家と同等以上の成果を出すことが証明されている(上位のProモデルでは74.1%に達する)⁷。特筆すべきは、その圧倒的な効率性である。人間の専門家と比較して「11倍速く」業務を完了し、必要コストは専門家の「1%未満」に抑えられるというデータが報告されている⁷。また、ソフトウェアエンジニアリングの実務能力を測る「SWE-Bench Pro」においても、GPT-5.1の50.8%から55.6%へとスコアを伸ばし、より厳格なVerified評価では80.0%を記録している⁷。コードの理解から修正、検証、改善までを一貫して自律的に行う能力は、APIの料金体系(入力100万トークンあたり1.75、キャッシュ入力 0.175、出力\$14)を考慮しても⁷、人間のエンジニアを雇用するよりも圧倒的に高い費用対効果を生み出す。東大入試での首席獲得は、この「専門家レベルの自律的タスク遂行能力」が、入試という制約された環境下で発露した一つの側面に過ぎないのである。

6. 専門家による答案の定性評価が浮き彫りにする「非対称

性」

スコアという定量的指標においては人間を完全に凌駕したAIであるが、実際の答案を分析すると、AIならではの特異な「強み」と、いまだ克服しきれていない「弱点」の非対称性が明確に浮かび上がる。河合塾の講師陣による定性的な採点講評は、現在のAIの認知構造の限界と特徴を如実に示している³。

6.1. 圧倒的な情報処理速度とマルチモーダル認識の光

講師陣が最も驚嘆したのは、その人間離れした処理速度と、膨大かつ網羅的な知識の引き出し能力であった。河合塾の生物科講師は、その圧倒的な解答作成能力に驚きを表明し、日本史講師も全モデルが余裕で合格水準に達していることを確認している³。また、英語の試験においても9割の得点を獲得しており、言語的処理の正確性は極めて高いレベルで安定している¹。画像認識(マルチモーダル能力)においても進歩が見られた。特にChatGPT 5.2は、PDFのレイアウトを深く理解し、問題文における複数行にわたって折り返された下線部の範囲を正確に特定するなど、高度な視覚的文脈の理解力を示した(一方でGeminiやClaudeには一部取りこぼしが見られた)⁶。

6.2. 画像認識の限界と空間的理解における課題

しかし、克服すべき弱点も存在する。第一の課題は、特定の複雑な画像情報の処理精度である。化学の構造式、数学や物理のグラフ、地理や歴史の地図といった「非言語的・空間的」な情報の認識において、依然として精度に課題が残っていることが指摘された³。特にClaude 4.5 Opusにおいてこの傾向が顕著であり、テキスト情報と図表情報が複雑に交絡する問題設定においては、空間的関係性の誤認が失点に直結した³。人間が直感的に把握できる図形的な対称性や地図上の地政学的な位置関係などを、純粋なデータ行列として処理するAIにとっては、依然としてノイズが混入しやすいボトルネック領域が存在する。

6.3. 論理構成における「メタ認知(出題者意図)」の欠落

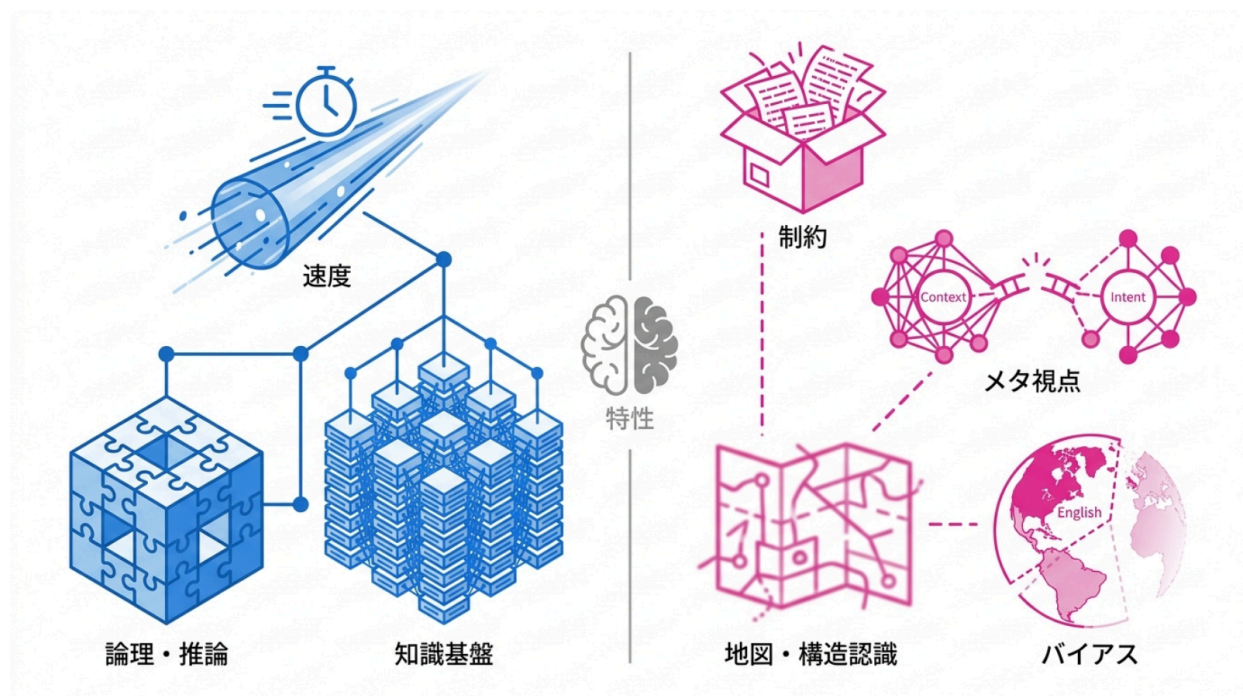
第二の、そしてより本質的な弱点は、世界史などの長文論述問題における「情報の取捨選択」と「論証の因果関係の提示」である³。事実、世界史などの論述問題の得点率は2.5割にとどまるなど、論述形式において明確な不得意分野が露呈した⁵。AIは膨大な歴史的事実を知っている(知識の量は人間を圧倒している)が、数百字という限られた字数の中で、複数の情報をどのように重み付けし、構成するかという能力に弱さを見せた³。これは、人間が答案を作成する際に自然と働かせる「出題者はなぜこの時代設定でこの問いを出したのか」という『メタ視点(出題者意図の推測)』が欠落していることに起因する⁶。AIは文脈全体から言葉の定義を再解釈することに苦勞し、辞書的な翻訳や事実の羅列に終始する傾向があり、長文の論理関係や因果関係を滑らかに構築する力が、数学的推論力に比べて相対的に遅れていることを示している³。

6.4. 制約の遵守失敗と文化的・慣習的バイアス

第三の課題として、物理的な制約の遵守と、学習データに基づく文化的バイアスが挙げられる。AIは、「指定された字数に厳密に収める」「解答欄の物理的枠内に収まるように文字量を調整する」といった、人間にとって当たり前の制約ルールを守りきれない場面が頻発した³。これは、日本語の文字数と、AIが内部で処理する「トークン数」の概念的なズレに起因する出力制御の難しさを示してい

る。さらに興味深い点として、物理学などの問題において、AIが「英語圏の物理学の慣習」を無意識に優先し、日本特有の問題設定において思わぬミスを誘発するケースが確認された³。これは、LLMの事前学習データが英語圏の文献に圧倒的に依存していることの副産物であり、ドメイン固有(日本独自の学術的文脈)への完全なローカライズには、まだチューニングの余地があることを示唆している。

専門家採点が浮き彫りにした生成AIの能力特性



河合塾講師陣の分析に基づくAIの認知特性の概念図。論理的推論や事実の網羅性において人間を凌駕する一方、出題者の意図を汲み取る「メタ視点」や、日本独自の解答慣習への適応、複雑な図表の空間的理解といった領域には依然として特有の死角が存在する。

7. 教育パラダイムへの根本的影響と今後の学習戦略

東大・京大の入試問題は、日本の教育システムにおいて「最も高度な情報処理能力と知識の統合能力を持つ人材」を選別するための、事実上の究極のフィルターとして長年機能してきた。そのフィルターをAIが軽々と突破した事実は、教育の目的と人間の知能の評価基準に対する根本的な問い直しを突きつけている。

7.1. 「知識蓄積・解答型」から「AI協働・問いの創出型」への転換

これまで学力の大きな象徴とされてきた「難しい問題を解ける」「大量の知識を正確に記憶している」「素早く正確に答えを出せる」という能力は、AIの機能によって完全にコモディティ化されたと言ってよ

い⁹。乳幼児期からの教育において、単に正解を導き出すトレーニングの価値は相対的に大きく低下している。教育専門家が指摘するように、今後の人間に必要となるのは「答えを出す力」だけではなく、「AIをツールとして活用し、理解を深める力」や、AIに対して適切な「目的の共有」を行う力である⁹。GPT-5.2時代のプロンプトエンジニアリングは、中間プロセス(検索や要約など)の細かな手順を指示する「思考の代替」から、成し遂げたい目的やビジョンをAIに共有し、最適なルートをAIに自ら設計させる「思考の丸投げ(デリゲーション)」へと進化している¹⁰。人間には、AIが導き出した論理に対して倫理的・社会的な判断を下す能力が求められる。

7.2. 大学選抜システムの崩壊と再構築への模索

入試の現場においても、生成AIの波はすでに現実の課題を引き起こしている。大学入試の志望理由書や自己PRなどの提出書類作成において受験生が生成AIに依存した結果、内容が均質化し、「書類だけで個人の熱意や適性を選抜することはほぼ不可能になる」という事態が進行している¹。これに対し、文部科学省や教育機関も生成AI対策の検討会を設置するなど対応に追われている¹²。今後は、知識量に依存しない「真の思考力」や、対面でのコミュニケーション能力、現場での即興的な課題解決力を測る方向(例えば、就活における対面面接の回帰など)へのシフトが不可避となっている¹。東大理三首席レベルの「解答マシン」が月額数千円で誰もが利用できる時代において、人間の知性の価値は、ペーパーテストの点数以外の領域で見出されなければならない。

8. 労働市場・産業構造への波及効果と「AX(AI Transformation)」の到来

この検証結果がもたらすインパクトは、教育界に留まらない。人間のトップ0.01%に相当する知能レベルを持つモデルが、人間の11倍の速度かつ1%未満のコストで実務を遂行できるという事実は⁷、高度なホワイトカラー労働市場の構造を根本から変革する力を持っている。

8.1. 「AI社員」の台頭と組織設計のパラダイムシフト

LifePrompt社の代表取締役・遠藤聡志氏が提唱するように、企業は目先の効率化ツールとしてのAI導入に焦るべきではない。むしろ、10年後、20年後のさらに進化したAIを前提とした、業務や組織の抜本的な再設計が必要とされている³。同社が提供を開始したAIプラットフォーム「AxMates」に象徴されるように、人間がAIに作業を外注する関係から、AIを「チームの一員」として迎え入れ、社内システム連携や権限設計を共に行う「AI社員(AIエージェント)」の時代が本格化している³。AIが自律的に業務を進め、人間がその進捗と最終的な方向性を監督するこの変革は「AX(AI Transformation)」と呼ばれ、DX(デジタルトランスフォーメーション)に次ぐ次世代の産業革命と位置付けられている³。

8.2. 社会実装の拡大に伴う新たなリスクとガバナンス

一方で、こうした高度な知能の普及は、新たな社会的リスクとガバナンスの課題を生み出している。政府や自治体レベルでもAIの導入は進んでおり、ハローワークにおいて3年分のデータを基に求職者に最適な仕事を提供する実証実験が行われる一方で、自治体の児童保護判定においてAIが誤判定を下し(全身あざになるまで殴られた子の保護の必要性を「低レベル」と判定)、理由がブラックボックス化したまま導入が断念されるといった深刻なケースも報告されている¹。企業においては、SNSや「通知から2分以内の投稿」を求めるアプリの普及により、社員が勤務先の機密情報や顧客情

報を不用意に入力・拡散させ、企業が謝罪する事態が頻発している¹。また、俳優や声優の顔や声をAIで無断生成する権利侵害に対処するため、法務省が有識者検討会を設置し、自民党のデジタル本部が著作権侵害やディープフェイク被害に対応するためのAI法改正の提言案(事業者への罰則検討含む)を了承するなど、法規制の動きが急加速している¹。さらに海外に目を向ければ、ChatGPTが銃乱射事件の容疑者と不穏なやり取りを行っていたとして、遺族や州司法長官からOpenAIに対する提訴や調査が行われる事態も発生している¹。軍事面においても、中国がステルス無人機にAIを搭載し、米中がAI覇権を巡ってデータセンターの建設競争(米国は民間主導、中国は国家主導)を繰り広げるなど、新たな冷戦構造の火種となりつつある¹。AIが東大理三に首席合格するほどの能力を持った今、その力をどのように制御し、社会の福利に結びつけるかという倫理的・法的セーフティガードの構築は、人類にとって待ったなしの課題となっている。

9. 結論: AIと共進化する未来の形

2026年度の東京大学および京都大学入試における生成AI「ChatGPT-5.2 Thinking」の首席合格という結果は、単なるテクノロジー企業の宣伝材料ではない。それは、人類が長年かけて構築してきた「知識の習得と論理的推論能力」を測る最高の指標が、機械によって完全にクリアされ、知能の特異点を超えた瞬間を記録した歴史的証明である。

本分析を通じて明らかになったのは、次世代推論モデルが自己検証・修復機能を伴う高度な推論エンジンを獲得し、数学などの厳密な論理的課題において人間の最高水準を圧倒しているという事実である。同時に、出題者の意図を推し量る「メタ認知」や、複雑なコンテキストの中での情報の重み付け、日本独自の文化的暗黙知の理解においては、依然として人間に一日の長があることも確認された。

今後、社会と教育が向かうべき方向は、AIと「知識量や計算速度」で競い合うことではない。コスト1%で人間の11倍の速度で実務をこなす知能を「社会インフラの前提」とし、それらを指揮・統合し、AI社員と協働する組織を設計することである。AIが「答え」を瞬時に出す時代において、我々人間に残された、そして新たに開拓すべき真の知性とは、膨大な選択肢の中から「どの問いを解くべきか」を見極め、社会に対してどのような倫理的・人間的目的を提示するかという「意志」そのものなのである。

引用文献

1. チャットGPT、東大理3「首席合格」... 昨年の合格圏外から理系 ..., 5月 2, 2026にアクセス、<https://www.yomiuri.co.jp/science/20260427-GYT1T00283/>
2. AI、東大と京大「首席合格」「チャッピー」最高得点, 5月 2, 2026にアクセス、<https://www.47news.jp/14213328.html>
3. 【大学受験×生成AI企画】最新AIが東大・京大の合格者最高点を突破、満点科目もあり - PR TIMES, 5月 2, 2026にアクセス、<https://prt看imes.jp/main/html/rd/p/000000003.000136448.html>
4. こざわ/とひ(@t_aldehyde) - Twilog (ツイログ), 5月 2, 2026にアクセス、https://twilog.together.com/t_aldehyde/date-20240814
5. AI、東大と京大「首席合格」「チャッピー」最高得点 - ZMSブログ - FC2, 5月 2, 2026にアクセス、<http://toshinzms.blog50.fc2.com/blog-entry-5804.html>
6. 【首席超え・満点続出】2026年度 東大・京大の入試問題をAI ... - note, 5月 2, 2026にアクセス、<https://note.com/lifeprompt/n/n85674c186fbc>

7. GPT-5.2(ChatGPT 5.2)で何が変わった？特徴・性能比較・料金 ..., 5月 2, 2026にアクセス、https://note.com/hiro_seki/n/nc4b58b974fdd
8. GPT-5.2 の教科書 - Zenn, 5月 2, 2026にアクセス、https://zenn.dev/microsoft/articles/openai_gpt52_textbook
9. チャッピーが東大・京大に首席合格した時代と - リコポ幼児教育, 5月 2, 2026にアクセス、
<https://lycopo.com/%E3%83%81%E3%83%A3%E3%83%83%E3%83%94%E3%83%BC%E3%81%8C%E6%9D%B1%E5%A4%A7%E3%83%BB%E4%BA%AC%E5%A4%A7%E3%81%AB%E9%A6%96%E5%B8%AD%E5%90%88%E6%A0%BC%E3%81%97%E3%81%9F%E6%99%82%E4%BB%A3%E3%81%A8%E3%80%81/>
10. 【2025年最新】ChatGPT 5.2とは？進化した機能やビジネス活用事例・導入の注意点を徹底解説, 5月 2, 2026にアクセス、
https://aismiley.co.jp/ai_news/what-is-chatgpt5-2/
11. 【2026年最新】AIが東大・京大で"首席合格"時代へー中学生・保護者が知っておくべき「これからの学び方」| 沖縄進学塾, 5月 2, 2026にアクセス、
<https://juku.okinawa/2026/04/29/%E3%80%902026%E5%B9%B4%E6%9C%80%E6%96%B0%E3%80%91ai%E3%81%8C%E6%9D%B1%E5%A4%A7%E3%83%BB%E4%BA%AC%E5%A4%A7%E3%81%A7%E9%A6%96%E5%B8%AD%E5%90%88%E6%A0%BC%E6%99%82%E4%BB%A3%E3%81%B8/>
12. 進学率58.6%過去最高の今、高校生がAIと「大学進学の意味」を問い直す - PR TIMES, 5月 2, 2026にアクセス、
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000001.000178558.html>
13. LifePromptのプレスリリース - PR TIMES, 5月 2, 2026にアクセス、
https://prtimes.jp/main/html/searchrlp/company_id/136448